

大島郁葉〔著〕

おとなの自閉スペクトラム症の心理カウンセリング

四六判並製・金剛出版

2025年8月刊

定価3,300円（税込）

評者＝井手正和

（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）



本書はおとなの自閉スペクトラム症（以下、ASD）者に対するカウンセリングを扱っている。タイトルからは、従来のカウンセリング技法を紹介する解説本を想像するが、実際にはそうした既存の書籍とは大きく異なる。本書には、著者のこれまでの臨床経験・インタビューに基づいてつくられた仮定のASD者が2名登場する。2部構成になっており、それぞれ1名の登場人物の人生を追体験する形を取っていて、ASD者の家族やカウンセラーが登場する。それぞれの人物の描写は非常に精緻であるため、物語の世界に深く引き込まれる。小説のように読むことができ、登場人物たちの描写や人物間のやりとりから巻き起こる出来事を通して、おとなになってASDの診断を受ける人の経験と、カウンセリングが果たす役割を理解できる。

また、本書ではASD者個人がもつ特性からくる困難に着目するのではなく、むしろ当事者を取り巻く社会が与える影響からくる困難に焦点を当てている。社会が与える影響にはASDに対する社会の偏見（スティグマ）を内在化させた親の存在や、学校環境などが挙げられ、それらとの相互作用によってトラウマを形成していく。例えば、1人目の物語では、家父長制の考えを強くもつ両親の下で本人もその考えを自分のものとし、それを他者に率直に伝えてしまうことでトラブルが起きるという描写がある。2人目の物語では、ASDに対する強いスティグマをもつ母親の下で育つことで、ASDに対する否定的な考えを植え付けられ、その特性が現れて他者に阻害されることを恐れてカムフラージュの行動を取る当事者の姿が描かれている。こうした当事者たちに対して、本書で登場するカウンセラーは、当事者が元々もっている特性の部分と経験によって形成されてきたトラウマを切り分けて考えることを大切にしており、後者をまずカウンセリングの対象として浮き彫りにしている。ASDに関して、ここまで社会との間で生じる困難を大々的に取り上げ、それに対するカ

ウンセリングのプロセスを詳細に描いた書籍はこれまでなかったのではないだろうか。

何より印象に残るのは、カウンセリングを通してASD者が自身のスティグマやカムフラージュに与えていた社会の影響に気づき、カウンセラーの言葉によって苦しみから解き放たれていく描写である。それもこの書籍における人物描写や情景描写が極めて優れているからであり、読書を通して登場人物と苦しみを共有した後に訪れる解放は非常に感動的である。

ASDの問題を個人に帰属するのではなく、社会の側が変わる必要があるという著者の思いが読み取れ、こうした考えの背景に高い人権意識があることが強く伝わる。社会の問題をクローズアップし、それにカウンセリングが果たすことができる役割を伝える本書を、ぜひ手に取ってほしい。